

# レーモン・クノーの『青い花』における歴史 ＝物語の終焉あるいは金、銀、鉄の形象（その1）

— 1264 年および 1439 年の物語 —

尾形弘人

## はじめに

レーモン・クノーの『青い花』は、175年の周期をもって過去から現在へと歴史を旅する中世封建貴族オージュの夢と、まさにこの作品が書かれていた1964年のパリ郊外に住むシドロランの夢とが、複雑かつ巧妙に交錯する物語である。二人の主人公は互いが互いの物語を予告し、反復し、書き換えながらテキストの複層性を織りなしていくが、しかし、彼らの在り方はその行動原理において際立った対称性を見せている。『青い花』の注釈的役割を担わされた『ひとつの規範的な歴史』（以下『規範』）を参照して言えば<sup>1)</sup>、スキャンダラスな言動によって時の権威にことごとく盾突き、立ち寄った五つの時代を暴力的に揺さぶるオージュは、歴史の「嘆かわしい同一性」（*H. M.*, p.91）を解体する《外的な力 *force extérieure*》を寓意していると言える。これに対し、日がな一日飲み食いしてはシエスタにまどろむだけのシドロランは、「何もしないことにいつも何かを見つける」（*F.B.*, p.62）という徹底した無為性によって、歴史の差異化を遅延させる《慣性の原理 *principe d'inertie*》として振舞っている<sup>2)</sup>。実際はそう単純ではないが、『青い花』の精密な読解を行ったジャン＝イヴ・プイユーも、観想的で無為な人生と活動的で実践的な人生とを対置し、「シドロランとオージュは、風刺と書いていいほど、二つの態度を具現している<sup>3)</sup>」と述べている。

ところで、この同じ批評家は『青い花』の結末部分について、登場人物たちは歴史＝物語を抜け出し、物語の結末は歴史の終焉を意味すると結論づけ

るとともに、これとは逆の読み方も「私が提示する読みを受け入れようとはしない人々の目からすれば可能である<sup>4)</sup>」と注意深く付言している。我々としては、テキストを内に閉ざしてしまわないように、是非ともそのような読者でありたいし、またあり続けるべきだと思う。実際、以前我々が『規範』について検討した際に可能性として提示しておいた『青い花』の読みは、彼の見解と鋭く対立するものであった<sup>5)</sup>。すなわち、未完のまま刊行された『規範』は、歴史の完結なくしてはその全的な意味の開示はあり得ないとするコジェーヴ＝ヘーゲル的な逆説を、まさしく未完という形式によって表わすもので、これが注釈として与えられている『青い花』の円環的構造ないし反復性もまた、決して言い当てることのできない歴史＝物語の終焉を先延ばしにするものと思われるのである。

我々はここで改めてこの問題を検討しようと思うが、それにしても『青い花』はあまりにも饒舌である<sup>6)</sup>。そこで本論では、歴史＝物語の終焉をめぐる考察を最終的な目的としながらも、まずは『規範』を参照先として『青い花』の物語展開を冒頭から順に追ってみたい。両テキストの関連性は明らかなのだから、この作業は作者が読者に求める《努力<sup>7)</sup>》という点では最も慎ましいものかもしれないが、しかし、あえて戦略的にこれに徹してみるとすれば、どうであろうか。つまり、単に『規範』が与えるとされる補足的な情報をテキストのあちこちに読み取るというのではなく、それが提示する歴史のモデルそれ自体を強引にでも『青い花』に当てはめて事を進めれば、いかなる読みが生まれるのか。物語の多義性を前にして、我々がまず知りたいのはこれである。『規範』の筋立てによって『青い花』の読みを拘束してみた場合、その読みは破綻するのか、それとも筋立てどおり読みきってしまうのか。

そのためにはまず、我々の戦略的な拘束の内容を確認しておく必要がある。《ひとつの集団の正常な変遷の図表》(H.M., p.71)をもとに『規範』の断片的な記述を総合して要約すれば、我々が読み取るべきものは以下のような歴史の筋立てである。

- 1) ある限定された地域における人間集団が、労働することなしに無尽蔵の食物を得る《黄金時代》：食物摂取に対する気安さ、笑いに満ち溢れた絶対的な幸福。
- 2) その地域における人口増加や突発的な大災害などによって引き起こされる食糧危機：黄金時代の終焉。
- 3) 危機の先延ばし
  - a) 人口の減少ないし食物供給の回復によってふたたび得られる労働なき飽食。ただし、将来の危機を予見せざるを得ない擬似的な黄金時代、すなわち《銀の時代》。
  - b) 集団の全体ないし一部が起源地の地を離れ、新たに労働なき豊穡を約束してくれる土地へと移住し、予見される危機を先延ばしにするもうひとつの《銀の時代》。
  - c) 減退的な解決法：食物の消費を減らすために、子供や老人を犠牲にして意図的に口減らしをすること。あるいは、性欲を制限し、出生率を下げる。ここにおいても原初の気安さはない。
- 4) 先延ばしできない絶対的な危機
- 5) 歴史的な存在として人間が選ぶ危機の回避策
  - d) 労働：人間の不幸の全面的な認識。創意工夫=発明によって、予見される危機を回避しようと努める真に人間的な歴史、すなわち《鉄の時代》。
  - e) 戦争や奴隷化：労働は存在するが、これを他者に強いることにより自らは労働を免れようとする解決法。
- 6) 予期せぬ大災害による滅亡（これはいつの時代でも起こり得る）。

もちろんこれが『規範』のすべてではないし、食糧危機の周期性や歴史の反復性といったものは捨象してある。だが、「食物摂取と生殖という問題に対する、すなわち自己の種の運命に対する人間の原初的な反応」(H.M., p. 54) が歴史の基本的な要素であるとするならば、『規範』の筋立てに従って

『青い花』の読みを拘束するという当面の目的のためには、以上を確認すれば十分であろう。各項の定義や意味づけはその都度確認することにして、さっそくテキストを読み始めよう。

### I-1. 1264年(その1): 歴史=物語の冒頭に隠された鉄=労働のテーマ まずはテキストの冒頭を見よう。

1264年9月25日、夜明け、オージュ公は城の天守閣のてっぺんに真っ直ぐ立ち、少しばかり歴史状況を凝視する。[……] 地平線には、疲れたローマ人、コリントのサラセン人、古代フランク族、孤独なアラブ人のふやけたシルエットが描かれていた。数人のノルマン人がカルヴァを飲んでいて。(F.B., p.13)

オージュが目にする過去の遺物は、栄えては滅びていった人々の栄華の夢を思わせる限りにおいて、彼の溜息を誘いましょう。しかし、オージュを「実に悲しく実に憂鬱な気分」(F.B., p.14)に沈めるこの歴史状況は、実は徹底した言葉遊びによって書かれており<sup>8)</sup>、軽妙な笑いが歴史の宿命性ないし冷酷さといったものを隠蔽しているかのようなのである。実際、オージュも、単なる《語呂合わせ calembour》と化してしまった歴史を嘆じ、「ここから抜け出すことは絶対にないのか」(F.B., p.14)と問うている。これこそが最終的に我々の答えるべき問いということになるだろうが、とりあえずは歴史の地平線に目を凝らしてみよう。そうすると、言葉遊びの連鎖を引き起こした最初のものに、否応なしに歴史の中へと投げ込まれた人間の姿が透けて見えてくる。《疲れたローマ人 Romains fatigués》とは、骨の折れる大仕事を意味する《ローマ人の労働 travail de Romain》の振りであり、歴史において額に汗して働く人間の姿に他ならない。労働する人間の時代を、クノーは鉄の時代と呼んでいる。とするならば、オージュの破壊性を象徴する動詞《ぶっ叩く battre》を用いた言葉遊びの中に、まさしく労働の隠喩たる鉄の

形象が潜んでいることも看過できない。

彼は妻をぶっ叩きはしない、故人だからだ、しかし三人いる娘をぶっ叩き、下僕を、女中を、じゅうたんを、いくつかのまだ熱い鉄鎖 *quelques fers encore chauds* を、田舎を、貨幣を、そして結局のところ、自分の脇腹をぶっ叩く。(F.B., p.14)

つまりは《鉄は熱いうちに打て *Il faut battre le fer pendant qu'il est chaud*》の振りであるが、これは先の《疲れたローマ人》と相まって、さりげない笑いの中に、人間を真に歴史的な存在とする労働=鉄という深刻な問題を提示する役割を果たしている。先取りして言えば、全体で5度言及される鉄の三つまでがこの時代に仕組まれており、他の二つ（「鉄のような灰色の背広 *complet gris fer*」と「有刺鉄線  *fils de fer barbelés*」）もわずか9行のうちに、しかも《労働者 *travailleur*》という語を挟む特異なかたちで用いられている (F.B., p.45)。つまり、起源の笑いを思わせる言葉の戯れの中に、およそ遊戯とは正反対のものが隠されているのである。

## I-2. 1264年（その2）：食を嘆く者、貪り食う者

さて、気晴らしのためにオージュは、しばらくの間ノルマンディーの城を離れ、建設中のノートル・ダムを見学しようと首都パリへと旅立つ。供をするのは近習のムスカイヨと人語を操る二頭の馬、饒舌なデモステースと寡黙なステファーン。馬上で揺られるオージュはやがて深く眠り込み、700年後のパリ郊外に住むひとりの男を夢に見る。「彼はある大都市の近く、<sup>おぼ</sup>舳い網で固定された平底船に住んでおり、その名をシドロランといった」(F.B., p. 16)。こうしてテキストはすみやかに現在時（1964年）へと場面を移し、直ちにシドロランの食事を語りだす。だが、海老は鮮度落ち、チーズはまるで石膏、果物は虫食い。満たされない食事に「またしても失敗だ」(F.B., p. 17)の一言を残し、シドロランはデッキの長いすに横たわっていつもの如く

シエスタの眠りに入る。次いでオージュが「まずい食事をしたような印象」(F.B., p.17)をもって目覚めると、場面はすでにパリの城門のすぐ近く。さっそく宿で夕食を取ることにするが、彼の方は「たらふく食べ、それから床について大いに食欲が満たされて眠った」(F.B., p.18)。このような夢の行き来を何度か繰り返し、テキストはふたたびシドロランの食事風景を語りだす。

[……] アンチョビーは<sup>ブリュヰニエ</sup>雨模様の古い鯨で、腸詰も付け合せの林檎とじゃが芋も見た目からしておによぶによ、ロックフォール・チーズはナイフの下で軋み、軟らかなババのラム酒は水としか呼べない代物。

シドロランは溜息をつき呟く。

—またしても失敗だ。(F.B., p.31)

相変わらずの愚痴である。常々シドロランは美味しい食事を楽しみたいと欲しているが、願いはいつも叶わず、繰り返される期待はずれの食事に《またしても失敗だ Encore un de foutu》と嘆くしかない。この口癖はそういった満たされない食を表わす記号であり、シドロランの物語全体をとおして6度繰り返されている<sup>9)</sup>。対するオージュの食の記号はといえば、同じく6度反復される動詞《貪り食う dévorer》が挙げられよう。彼は雲雀<sup>ひばり</sup>の煮込みを、干したジャムを、鰻<sup>うなぎ</sup>のゼリー寄せを、パテを、アンドウイユを貪り食<sup>10)</sup>い<sup>10)</sup>、2時間を費やす昼食も彼にとっては「かなり質素なもの」(F.B., p. 202)である。一方の嘆きと他方の豊満、対称的な二人の食の意味するところは何か。手掛かりとなるのは『規範』の次の記述である。「この最初の期間、人間は耕作も労働もせず<sup>11)</sup>に食す。それは純粹に貪り食う者 dévorantで、掠奪する者である」(H.M., p.38)。ここで最初の期間とは黄金時代に他ならない<sup>11)</sup>。とすれば、冒頭において食欲が全的に満たされるオージュは、この幸福な時代の住人ということになるのだろうか。そうだと断言し難いのは、オージュの物語で二度だけ語られる失敗した食事のひとつが、まさしく

この同じ時代に置かれているからである。

— ボルシチがないとしても、と公爵は落ち着いて言う、もつ料理は食べることができよう。

しかし料理人はまわりの動揺に押されて、料理を火の中に落としたりしたところだった。

— またしても失敗だ！ と公爵はどなった。(F.B., p.34)

パリでの最後の食事で、不用意にも口を利いてしまった愛馬デモステースが皆を恐怖に陥れ、オージュは楽しむはずの「贅沢な料亭」(F.B., p.31)の自慢料理を食い損ねたのである。ここで彼はシドロランの嘆きの記号を口に行っているが、これと同様に重要であるのは、この食い損ないが先に引用したシドロランの食事の直後に置かれている点である。つまり、『青い花』の冒頭は、はじめに二人の主人公の対称性を強調しておいて、すかさず両者の二重性ないし反復性を印象づけるのである。さらに、ここまではシドロランの物語にしか登場しなかった《ウイキョウの酒精 essence de fenouil<sup>12)</sup>》なるものが、この場面で2頁の間に5度反復されることにより、二人の関係性をよりいっそう目立たせてもいる。対称的かつ相同的なオージュとシドロラン、二人はいったい何者なのか。

### I-3. 1264年（その3）：城の中、城の外

パリ旅行のついでに聖王ルイに謁見したオージュは、準備中の第8次十字軍への参加を求められるが、ノルマンディーの田舎貴族は断固としてこれを拒んだ。カルタゴ、聖アウグストゥス、ユグルタ、スキピオン、ハンニバル、サランポーなどを引き合いに出し、「せめて歴史の回想のために」(F.B., p.25)と説得しても、オージュは頑として聞き入れない。

— いいですか、閣下、私は田舎の自分の小さな城に引きこもったの

です。そこで善き神が悩みの種として私に与えた娘たちを育て、ダミエッタや他の遠い植民地から持ち帰ったマラリア熱をいつ直るでもなく手当てし、司祭にして聖人君子、オネジフォル・ピロトン神父が聖戒の道へと私を導いてくれます。どうして、閣下、そうです、どうして私の小さな田舎を離れることなどありましょうか、次の年には大壺の中で塩漬けになった私を連れ帰ることになるというのに。(F.B., p.25)

これは策略に長けたオージュの逃げ口上で、彼は娘たちをぶっ叩き、聖王がいみじくも言うように「元氣澁刺」(F.B., p.24)で、オネジフォルはオージュとの殴り合いをも辞さない「戦闘的な神父」(F.B., p.40)である。だが、実に奇妙なことに、ここでのオージュは我々が先に示したオージュ像とは正反対のものである。なるほど国王に従わないという点では反抗的であるが、「自分の小さな城の安楽な生活 confort」(F.B., p.26)のために十字軍を拒否する彼は、歴史を突き動かす外的な力というよりは、むしろそれを停滞させる慣性の原理を思わせる。これはどういうことなのか。ここでもう一度、動詞《貪り食う》の分布を見ると、6度の使用のうち4度までが彼の城での食事の場面に見られる。この割合が高いかどうかは判断しかねるところだが、オージュが心置きなく胃袋を満たすノルマンディーの城は、やはり食が全的に満たされる黄金時代の風景を強く思わせよう。ここでも即断は避けるが、そのような起源の場の住人であるとすれば、彼が十字軍を拒み自分の城に留まりたいと望むのも当然であろう。というのも、「集団はどれも、それがその前に身をおいていた状態に留まろうと試みる」(H.M., p.57)からで、それがこの上なく幸福な場であれば尚更のことである。

しかし、今、オージュは城の外にいるのである。十字軍を準備する聖王ルイが中心に君臨するパリ、そこはどのような場なのであろうか。

— [……] <sup>リュイ</sup> 彼、ルイは、ダミエッタとマンスールで私がいかに彼に  
 仕えたか忘れていない。植民地での戦争の何たるか、<sup>リュイ</sup> 彼、ルイは知って



いるし、私のことを分かっている。彼<sup>リュイ</sup>、リュイはそこに戻りたがっている。それは彼の問題だ。彼<sup>リュイ</sup>、リュイは私とは異なる。彼は敬虔な男で、いつの日にか彼の名がカレンダーに見られることだろう [……]。(F.B., p.27)

『規範』によれば、ここで言及されている植民地とは「鉄の時代に固有の複合的な解決法」(H.M., p.53) のひとつで、他者に労働を課する奴隷化の緩やかな形式である。とするならば、これを企てる聖王リュイが統治するパリは、すでに労働が知られている鉄の時代を表わしているのではなかろうか。実際、オージュが首都パリに旅立ったのはノートル・ダムの《工事=労働 travaux<sup>13)</sup>》を見るためであった。つまり、そこは労働が進行中の場、本来の意味での歴史が展開されている場である。それ故、オージュが語っていることは、自分は鉄の時代の人間ではない、歴史に名を残すような労働はご免だ、ということに他ならない<sup>14)</sup>。とすれば、この上なく安楽で全的に食が満たされるノルマンディーの城は、黄金時代とは言わないまでも、少なくともパリに表象される鉄の時代以外の何物かであり、逆に言えば、オージュはパリという他なる場所で、あの嘆きの食を経験したことになる。デモステーンにしても、オージュの「美味しい干草、美味しい藁、素晴らしい燕麦を我が馬たちに食べさせるように」(F.B., p.33) との命令を果たさない馬丁に文句を言っただけで、理由を知った主は、おまえは正しい、と許してしまうのである。オージュが住む世界では、たとえ馬であっても食は満たされるべきものらしい。実際、城に戻った時、「その見慣れた光景は公爵を大いに安心させた」(F.B., p.40) のであって、城の外と中は二つの異なる世界なのであろう<sup>15)</sup>。

#### I - 4. 1264 年（その4）：城の中、黄金の横溢

結局、前回の十字軍の手柄により今回は参戦を免れたオージュだが、卑怯な田舎貴族に憤ったパリの住民が腐ったタマゴや萎びたトマトを浴びせかけ

てきた。剣を振りかざして民衆を蹴散らすオージュ。だが、安堵も束の間、今度はデモステーンの件で妖術師扱いされて、またしても大立ち回り。さらに、パリ市外へ出るために巡査とも一悶着。ただ単に自分の城に帰ろうとしただけなのに、何かがそれを許さず、ついにオージュの物語が動き出す。その何かとは、自分の城で慣性の原理に埋没しているオージュを突き動かし、対立し、破壊しようと介入してくる外的な力に他ならず、王の軍隊という具体的なかたちをとって、十字軍を拒否したオージュを否応なしに歴史の舞台に引きずり出そうする。

地平線に王の保安部隊の分遣隊が現れた。見張りがオージュ公に知らせに来て、彼は必要な命令を下した、ピロトン神父が目覚ますほどの大声で怒鳴りながら。

— 保安部隊のご到着だ、と公爵は揉み手しながら言う、奴らをぶっ殺してやろう。(F.B., p.53)

城に通された代令官は、オージュの手により天に召された民衆のために祈り、一人あたり100エキュの罰金を納めるか、あるいは十字軍に参戦するか、どちらかを選ぶよう、王の命令を伝える。極めて示唆的であるのは、この場面において、ということはオージュの城の中において、「精製された純粋で混ぜ物のない金でできたトゥール製金貨 *écus tournois d'or raffiné pur et sans alliage*」というまったく同一の表現が5頁の間に6度、執拗に繰り返されることである<sup>16)</sup>。この純粋な金の過剰なまでの反復は、これまで保留を重ねてきた我々の読みにとって決定的である。この金貨はオージュの安楽な暮らしを保証するものであり、それが城の中に満ち溢れているのが彼の見慣れた光景なのであろう。豊富な金によりひたすら貪り食うことを許すこの城はやはり黄金時代の隠喩に他ならず、オージュは、少なくとも城の中では、起源の幸福な人間の後裔として『青い花』に登場してきたのである。

繰り返すが、黄金時代の定義は労働なき飽食である。そのような場に生き

る者にとっては、たとえ他者に課する労働ではあっても、労働の存在自体が否定されるべきであろう。実際、十字軍=植民地戦争など真つ平ご免のオージュは、幾ばくかの出費で事が済むのならばと、王に自分の黄金の一部を差し出すことも考えた。だが、その大部分が遺族への見舞いではなく十字軍の準備に費やされること、その場で支払うべき前金がかかなりの額であること、その額が「増えこそすれ、減ることは決してない」(F.B., p.57) ことを知るに及んで、オージュはついに腹を決める。

— 畜生め！ とついに公爵は叫んだ、決心はついた、聖王はわしの精製された純粹で混ぜ物のない金でできたツール製金貨の色を見ることなどない、灰まみれのミサを聞いたりなんかするものか、我らが父マリアに告白す *patravéfiteors* なんて長々と言ったりするものか<sup>17)</sup>、十字軍になんか加わるものか。ここから出て行け、空威張りの保安部隊め！ (F.B., p.57)

オージュが黄金時代の人間であるとすれば、失う金貨が増えこそすれ減ることはないということは、人口が増えて食物が減ることはあっても、その逆はないことを意味する。かつて労働を知らない幸福な一組の夫婦がいて、時とともに増え続ける子孫も起源の場を離れず、しかも「偶発的な死亡原因は排除されており、人はそこで《老衰で》死ぬ」(H.M., p.45) というのが黄金時代のイメージであり、こうして増え続けた人口がやがて決定的な食糧危機を引き起こすというのが、その破局のシナリオなのだから、オージュが代令官を自分の城から追い出すのは当然であろう。十字軍参戦はすなわち労働の受け入れであり、労働の拒否はすなわち莫大な金貨の喪失を意味する。つまり、前金の増額をちらつかせて十字軍参戦を強要する代令官のやりかたは、いずれにせよオージュの黄金時代に重大な危機をもたらすのである。

こうしてオージュは聖王ルイと全面対決に入ることとなるが、しかし、狡猾な歴史は狙いどおりに彼を歴史の表舞台に引きずり出したと言えるのだろ

うか。確かに《代令官=先触れ *héraut*》によってオージュの物語は動き出したかのように見えるが、しかし、その目的は黄金時代に留まり、真に歴史をその名に相応しいものとする労働を拒絶することにある。つまり、動き始めた歴史の流れを食い止めるためにオージュの物語は動き出したのであり、逆説的な歴史=物語の始まりである。実際、王の軍隊の到来を知らされて「何という話だ *Quelle histoire!*」(*F.B.*, p.54) と事態を嘆くオネジフォルに対し、代令官を追い出したオージュは、「私に馬鹿な話をしてはならぬ *Il ne faut pas me raconter des histoires*」(*F.B.*, p.58) と叫んでいる。つまり、歴史=物語などのご免だと叫んでいるわけで、王に盾突くオージュは城の外から見れば極めて危険な存在かもしれないが、彼自身は城の中の安楽を手放すまいと、慣性の原理に従っているだけなのである。

#### I - 5. 1264年(その5): 黄金時代の終焉の暗示

ここで強調すべきは、黄金時代を象徴する金の執拗な反復が、1264年の物語の結末近くに置かれていることである。すなわち、これはむしろ黄金時代の終焉を暗示しているのではなかろうか。だが、そう言えるためには、黄金時代の永続性に疑いを持たせるような危機が必要である。というのも、「何人かの人間が最初の時期に終わりをもたらしたものに類する危機ないし大災害を予見することができる(これは最初の時代では不可能である。なぜならば彼らは想像力を養うための要素をもたないから) ようになる時がやって来る」(*H.M.*, p.27, 強調はクノー) からである。ここで俄然意味を増してくるのが、先の食べ損なった食事のエピソードである。城の外であるとはいえ、いや外であるからこそ、オージュは食の危機を経験できたわけで、城の中では想像し得ない危機の予見をパリという他所で学んだのである<sup>18)</sup>。実際、籠城を決め込んだオージュはこう述べている。

— 用心はしておいた。わしが蓄えておいたもので、実にキリスト教精神溢れる王が十字軍に行って戻ってくるまでの時間は耐えることがで

きよう、もし戻ってくればの話だが。(F.B., p.59)

黄金時代の人間は将来に備えて《用心 précautions》する必要はなく、また、後に見るシドロランのストックにも通ずる《蓄え réserves》は危機の予見なしには不可能である。いわばオージュはパリでの経験を活かして来るべき危機を想像し、起源の幸福な場に住む者として、あり得るかもしれない黄金時代の終焉を避けるべく用心し蓄えておいたのである。実際、今や、「王の保安部隊は、城の城壁から適切な距離をとって、公爵、彼の臣民、彼の家畜の食糧補給用の食べ物に手をつけ始めた」(F.B., pp.58-59) のであって、避け難い食の危機が、黄金時代の破局の予兆が、城の外から忍び寄っていることは確かであろう。こうして、オージュの1264年の物語は、「もし必要とあらば、人間の肉を食うことにしよう！」(F.B., p.59) という何ともスキヤングラスな言葉を残して幕を閉じる。この人食いの意味を知るためには、175年の長き眠りにつくオージュの目覚めを待たなければならない。果たして金は守られ、食は今後も満たされるのだろうか。

#### I-6. 1264年 (その6) : 仕掛けられた銀：銀の時代のキャンパー

以上のようなオージュの物語=歴史を夢に見ているシドロランの日常に何か変わったことがあるとすれば<sup>19)</sup>、キャンパー達の訪問が挙げられよう。彼の平底舟の近くに「キャンパーのためのキャンピングのキャンプ場 camps de campagne pour les campeurs<sup>20)</sup>」があつて、キャンパー達がしばしば道を尋ねに訪れるのである。シドロラン自身が「重要ではないちょっとした出来事」(F.B., p.23) と言うように、その意味はまだまだ漠としているが、しかしテキストにおいて初めて《銀=お金 argent》に言及される次の場面は見過ごすわけにはいかないだろう。

—それで、あなた方はどうやって移動するのですか、とシドロランは尋ねた。徒歩、馬、車ですか？ ヘリコ、自転車、<sup>ストップ</sup>ヒッチですか？

[……]

— もちろんヒッチハイクです。

— 私は時々オートタクシーで旅行します。経済的ではないですけど。

— お金 argent なんかどうでもいいのです。(F.B., p.21)

テキスト全体で11度言及される《argent》は、この時代の物語にはこれしかない。ここではお金という意味で用いられているにせよ、キャンパーがこれを口にするには実に示唆的である。注目すべきは、シドロランが彼らに「可愛い小鳥さん mes petits oisillons」(F.B., p.20) と呼びかけ、また別のキャンパーも自分のことを「愚かな娘=雌鳥 oiselle<sup>21)</sup>」(F.B., p.39) と称している点である。さらに、秋も深まるや彼らは「移住 migrer し始める」(F.B., pp.165, 166) が、この動詞についても典型的な渡り鳥のツバメが引き合いに出されている(F.B., p.214)。とすれば、《キャンパー=渡り鳥》という等式は、いかなる点において成立するのか。渡り鳥が季節によって移動するのは生殖という目的もあろうが、やはりより豊富な食物を得るためであろう。とすれば、キャンパー達は、労働なくして食物が得られる場に移動する銀の時代の人間を思わせはしないだろうか。だが、何故ここでキャンパーは銀=お金について否定的な返答をしているのか。その答えは、後にオージュがキャンパーとしてシドロランの時代へと到達する時に明らかとなる。

いずれにせよ、オージュの物語の冒頭に鉄が密かに嵌め込まれていたように、シドロランの物語にも伏線として銀が仕掛けられており、オージュの黄金の横溢以前に鉄と銀がすでに登場していたことになる。だが、これは我々の拘束的な読みを否定するものではない。冒頭のオージュにおける鉄以外はすべてシドロランの物語に登場するもので、また、例外的なオージュの鉄も、詰まるところは言葉の遊びでしかなく、やはり城の中に満ち溢れる黄金がこの時代を象徴する形象であると言えよう。

## II-1. 1439年(その1): 黄金時代の延命

さて、時代は1439年に移った<sup>22)</sup>。聖王ルイとの戦はどうなったのであろうか。「保安部隊は、もはや荒廃した墓しか残っておらず、苔がそれらを蝕んでおり、もうみんなすっかり忘れてしまっていた、ルイ9世御方の時代の戦で死んだ保安部隊のことなど」(F.B., p.66)。どうやらオージュは王の攻撃に耐え抜いて、175年の眠りについいたらしい。その語られざる部分において百年戦争を闘ったオージュがいよいよ目覚め、先の時代と同様、城の天守閣の砲床から、「少しばかり歴史状況を凝視する」(F.B., p.67)。

一人のゴドンも視界にはおらず、どの沿岸からにせよ、どの国からにせよ、軍人は一人もいなかった。無人と言ってさえよかった。百姓がちらほら、あちこち荒れ果てた土地をほじくり返していたが、この風景の中では物の数には入らず、かろうじて見える程度だった。(F.B., p.67)

彼が見たものはもはや言葉遊びではない。笑う力もなく飢饉に苦しむ城外の人々である。オージュは溜息をつきはするが、目覚めて最初にしたことは、雲雀の煮込みを貪り食うことであつた<sup>23)</sup>。「こいつはまったく美味だ」と叫び、「だが、串刺しにしてローストした五歳の子供ほどではない」と冗談に興じるオージュ (F.B., p.67)。またしても人食いのテーマであるが、いずれにせよ、城の中はいまだ安泰で、とりあえず金は守られたらしい。だが、我々としては、食事を待たせる料理人に「おまえのせいで腹が空く tu me donnes faim」(F.B., p.69)と愚痴るオージュにやや不安を覚える。あの失敗した食事の際にも空腹という語を発しなかったオージュが、ここで初めて、しかも自分の城の中で、およそ彼には似合わないこの言葉を口にしたのである。果たして黄金はいまだに潤沢なのだろうか。とはいえ、オージュの束の間の空腹は干したジャムを貪り食うことによって直ちに癒され、やはり城の中はまだまだ安楽らしい。だが、人食いを冗談の種にして笑ってばかりもいられないことは、オージュ自身が知っている。

—我々の良き友ジルの訴訟は、我々の勢力をそぎ、我々を命令に従わせるための反封建的で陰險な手段を予告するものだ。(F.B., p.69)

ジャンヌ・ダルクの指揮の下、オージュとともに百年戦争を戦った若き元帥ジル・ド・レは、武勲むなしく、いまや人食いの罪で裁きを待つ身となった。だが、オージュに言わせれば、これは国王が封建貴族を去勢するために仕掛けた罠だ、というのである。こうして、《何という時代だ！ Quelle époque!》と叫び、オージュはジル・ド・レの解放を国王シャルル7世に要求すべく首都パリへと旅立つことになる。が、実際、どのような時代なのだろうか。これに答えるかのように描かれるのが、シドロランの物語において3頁の間に5度反復される《argente》である<sup>24)</sup>。ひとつだけ場面を飛ばして、先にこちらを見ておこう。

## II-2. 1439年(その2): 銀の時代の予兆

ある日、キュヴトンなる見知らぬ男が、シドロランの娘ラメリーとの結婚の許しを求めにやって来た。彼は義父と平底舟で同居することも考えていたが、シドロランは、他の二人の娘も結婚後には出て行った、との理由でこれを拒否する。キュヴトンは「いずれにせよ不足しているのは場所ではない」(F.B., p.78)と反論するが、しかし、シドロランの凡庸にも思われる言い分にも深い意味が隠されているのではなからうか。シドロランの住む平底舟は《ラルシュ L'Arche》とも呼ばれているが、この《箱舟 arche》は舳い綱で岸に繋がれ「まったく動くことは不可能」(F.B., p.184)で、また別のところでは「大きくはないが、船の上では、お分りのとおり、場所は常に限定されているもの」(F.B., p.145)とも述べられている。これらは『規範』が記述する《列島 archipel》を思わせはしないだろうか。すなわち、「列島の場合、第二の集団のいくつかが移住することは自明のこと」(H.M., p.84)で、結婚による人口増加が引き起こす食糧不足を避けるために、二人の娘は起源の箱舟=列島を離れたのである。さらに、キュヴトン本人の語るところ



によれば、パリ交通公団のバス運転手という職業柄、「あらゆる路線の右にも左にも子供の種を蒔くことは造作もない」（*F.B.*, p.78）ことで、しかも、彼の祖父は合法・非合法、少なくとも72人の従兄弟を彼に残したという。環境も才能も申し分ない。実際、ラメリーはすでに彼の子を宿しているらしく、もし彼と同居となれば人口の爆発的な増加もあり得る。やはり将来の食糧危機を避けるためにも、彼を一緒に住まわせるわけにはいかないだろう。

結局、郊外の一戸建てを探すことに話はまとまるが、しかし先立つものが必要である。そこで運転手はおずおずと「昔、持参金と呼ばれていたもの」（*F.B.*, p.81）を求めるが、娘に代わる家政婦を雇うつもりでシドロランに金をだす気は毛頭ない。

— さあ、さあ、とシドロランが付け加える、まさかあなたはお金のことしか頭にない男 *homme d'argent* だと主張するつもりはないのでしょうか？

— もちろん違います。それに三つ子の姉妹、何と言っても三つ子の姉妹です、私はきっと新聞に写真が載ったり、テレビのニュースに取り上げられるチャンスさえ得られるかも。そうは思いませんか？（*F.B.*, p.82）

先のキャンパーと同様、ここでも《*argent*》はお金の意味で用いられているが、シドロランの問い掛けは我々の読みにとって極めて示唆的である。あり得たかもしれない黄金時代の終焉を夢に見たシドロランが、この新参者について、次に来るべき銀の人間なのか、と問うているのである。キュヴトンは即座に否定しているが、これは当然と言えば当然であろう。なにしろ彼は労働を知っているのだから<sup>29)</sup>。しかし、もしラメリーが三つ子の姉妹でなければ、どうであっただろうか。結婚に対する彼の迷いを見れば<sup>29)</sup>、持参金を諦めても見返りにある種の名声期待されるが故に、キュヴトンは彼女との結婚を決意したようにも思われる。つまり、この稀有な条件がなければ、逆

の答えが、すなわち銀の時代の肯定が、彼の口から発せられていたかもしれないのである。いずれにせよ、実に危うい問い掛けがなされている間、その裏側のオージュの物語で、黄金時代から銀の時代への移行が用意されつつあることは、大いにあり得るだろう。しかし、そう言えるためには、決定的な食の危機が必要である。今のところオージュはそのような危機を知らない。1264年の食い損ねた食事にしても城の外での経験であったし、1439年の城の中での束の間の空腹も食の嘆きには至らなかった。このようなものとは根本的に次元を異にする決定的かつ絶望的な危機を、果たしてオージュは経験するのであろうか。

### II-3. 1439年(その3): 黄金時代の末期症状

話は囚われの人食い元帥の解放であった。パリに向かう途中、「一口ごとに薄色の赤ワインを一飲みしつつ鰻のゼリー寄せを貪り食いながら」(F.B., p.73) 夕食を待つオージュは、居合わせた一人の貴族をテーブルに招き、この上なく豪華な食事に舌鼓を打つ。まずは、マカロン、洋ナシ、臓物の三種のポタージュ。次はローストを若芽のソースとナツメグのソースで。さらに香辛料が効いた二つめのロースト。仕上げに干したジャムと砂糖菓子をいくつつか。「あたりの街中は飢饉であるが、やはり食事はきちんと終えねばならぬ」(F.B., pp. 73-74) とは、何という余裕であろうか。今、彼は城の外にいたのである。しかも、あたりは飢饉に見舞われ、先のパリでの食事よりも遥かに食の危機に近いはずである。それなのにこの豪華、この健啖。やはりオージュの食は満たされ続けるように見える。しかし、皮肉にもこの実に豪華な食事がきっかけとなって、オージュの城はふたたび食の危機に近づくことになる。ジル・ド・レの解放もそうであるが、そもそも国王がイギリス人から取り返してやった首都パリにはおらず、ロワールの城に居を構えていることを知ったオージュは、食を共にしたこの貴族と仲間達が企てたシャルル7世への謀反に加わるが、同志はことごとく間抜けで、頼みの王太子(後のルイ11世)にも裏切られ、結局、彼一人がフランス国王に歯向かうことに

なった。またしても籠城である。

— わしは身を守る必要があるのだ、友よ。わしは今日か明日かと王の保安部隊を待ちうけておるが、踏んづけられてぺっちゃんこは望まぬが故、用心して現代の発明品と最新作を買っておいた。(F.B., p.86)

先の聖王ルイとの戦と同様、オージュは相変わらず用心を怠らず、大砲と銃器を購入しておいた。これは賢明である。しかし蓄えの方はどうであろうか。これらの武器は高くついたはずである。城の食卓をよく知る料理長はこう打ち明けている。「私が扱える蓄えでは、身分の高い方々の三十人分もまかなえないでしょう」(F.B., pp.91-92)。シドロランが銀の人間の可能性を問うている間、オージュの黄金はこれほどまでに逼迫していたのである。ところが当の城の主は、宗教会議から戻ってきたオネジフォル達の歓迎に、彼ら目がけて大砲を放っては悪ふざけに興ずるだけで、一向に意に介していないようである。だが、自分の城の安楽を守るための、言い換えるならば、歴史との関わり合いを拒むための《現代の発明品と最新作 inventions modernes et dernières nouveautés》は、歴史が歴史たる由縁のものに他ならない。『規範』には、歴史は単調であるが、「しかし、どこかに新しい何かがある、現実に歴史の本質をなす何かがある。それは諸々の発明品である」(H. M., p.92) とある。「私は教皇派で封建制度派だ」(F.B., p.87) と宣言し、王権が増大することを是とする「現代的な思想 idées modernes」(F.B., p. 87) を嫌悪する限りにおいて、ここでもオージュは慣性の原理であり続けるが、しかし、彼が頼りとするものは、皮肉なことに城の外側で絶えず新しさを増す歴史の産物なのである<sup>27)</sup>。オージュは「幸いにもわしには可愛い大砲がある。さあ、お前が戻ってきたのだから、もう話はよして [=歴史はいらぬから pas d'histoire], わしに神の加護を祈っておくれ」(F.B., p.87) と、相変わらず歴史を城の外に排除しようとするが、抗し難い歴史の流れは大砲と銃器としてすでに城の中にまで入り込んでいるのである。先の料理長

はいみじくも「あなたが被ったクルヴリン砲はまだまだ始まりに過ぎません。この辺りはいずれ激しい戦となりましょう、しかもそう遠くなく」(F. B., p.91)と語っている。つまり、城の蓄えが残り少ないことを知る彼は、前=歴史的な黄金時代がいよいよ終焉に近いことを仄めかしているのである。

#### II-4. 1439年(その4): 前半最後の金と隠された銀と鉄、あるいは瀕死の黄金時代

このように読み進めるならば、次に用意されたシドロランの場面に、金がぼつんとひとつ目立たないところに置かれていることも、実に意味深いことではなかろうか。彼は友人の女術アルペールと待ち合わせをした居酒屋『酔い』に赴く。次はその内装の描写である。

[……] 実際、その装置 [=ネオン灯] の機能にはちらつきがあり、1791年にチャールズ・タウン(マサチューセッツ)で生まれ、1872年にパキプシで没した例の有名なアメリカ人画家によって発明されたあのアルファベットで信号を送っているかのように思われることもある。奇妙な偶然の一致により、シドロランの頭のちょうど真上には、サミュエル・フィンリー・ブリーズ・モースの瀕死のヘラクレスの複製が掛けられており、彼は1831年にアデルフィ芸術協会の金メダル *médaille d'or* を獲得したのであった。(F.B., p.95)

直前のオージュの物語との関連において、この記述が奇妙な偶然の一致でないことは明らかであろう。チャールズはシャルルの英語名であり、モルス信号という発明に言及されるのも、オージュが大砲=発明品を購入したからに他ならない。それ以上に興味深いのは、この場面において三度繰り返される《サミュエル・フィンリー・ブリーズ・モースの瀕死のヘラクレス *Hercule mourant de Samuel-Finlay-Breese Morse*》という表現である。

オージュが「反復法はレトリックの中で最も芳しい花のひとつである」(F. B., p.69) と述べているように、また実際、《またしても失敗だ》、《貪り食う》、《ウイキョウの酒精》といった数々の反復表現が示唆的であったように、この表現にも何か特別な意味が込められているのではなからうか。振り返ってみれば、175年の時を経てふたたび目覚めたオージュは、実にヘラクレス然とした怪力を発揮しつつ、1439年の物語に戻ってきたのであった。「彼の姿に気づかなかった見習い料理人の幾人かは、古靴の強烈な蹴りを食らって、ぶっ飛んであちこちに落っこちた」(F.B., p.67) ののである。とすれば、瀕死のヘラクレスは、黄金時代に住むオージュの今現在の姿なのではなからうか。また、発明家にして画家のモース Morse の名には、ローマ神話における死神モルス Mors が潜んでおり（さらに言えば、Finlay にも終末=臨終 fin が潜んでいる）、瀕死のヘラクレス=オージュを冥府へと誘うかのようなようである。とすれば、このような実に多元決定的な描写に嵌め込まれた金メダルが、『青い花』の前半最後の金であることも偶然ではないだろう。先の料理長の話と同様に、一切は黄金時代の終焉を予告するかのように、この居酒屋の風景に収まっているのである。

さて、最後の金がネオン灯のちらつきを反射して明滅しているかのようなこの居酒屋で、シドロランはアルペールに何を語るのだろうか。

— [……] これからは自分で料理をしなければならぬし、下着を洗ったり、靴下を繕ったり、甲板を掃かなければならぬ。こんな仕事はうんざりだし、それにみんな女がやるものじゃないか。分かるかい、言いたいこと。(F.B., p.99)

要するに、家事の一切を任せていた娘ラメリーが結婚するので、彼女に代わる家政婦の世話を依頼しているのだが、シドロランの言うところの「アルゼンチンの [=銀の] 淫売屋 bordel argentin や石油のハーレム」(F.B., p. 100) で金を稼ぐ娘たちは、どこか遠くの地へと移住して豊かに暮らす銀の

時代を思わせる。また、アルベールの述懐「まったく、あいつらとよしたら、やたら熱心な植民地開拓者 colonisatrices だ」(F.B., p.101)の方は、先の《鉄の時代に固有の解決法》を想起させる。つまり、最後の金を語るに際して、テキストは用意周到に銀と鉄とを場面の中に潜ませているのである。これに加え、家事を女性の労働と決めつけるシドロランの口ぶりは、『規範』が語る《サビニ女の誘拐》を強く想起させる。それは「性欲は同姓愛によって鎮め得るのであるから、これを満たすというよりは、自分たちのために働く奴隷を獲得するために」(H.M., p.69)女性を誘拐するというもので、実際、シドロランは「基本的に彼女を性的に所有することにはこだわらない」(F.B., pp.99-100)と語り、また、テキストはアルベールの同性愛を仄めかすことも忘れていない<sup>28)</sup>。その彼はシドロランに「君が彼女たちに申し出るものは未来ではない。仕事なんて、彼女たちにはうんざりだ」(F.B., p.100)と述べているが、もしこの身勝手な希望が叶うならば、それは実にシドロランらしい解決法である。彼はこの《誘拐》によって、しかもこれを他人任せにしておいて、自らは労働を避け続けることが可能となるのである。彼が求める家政婦はいつ現れ、どのような食をシドロランにもたらすのか。だが、それは後の話である。

## II-5. 1439年(その5): 絶対的な危機と黄金時代の終焉

話が込み入ってきたので、これまでの読みを整理しておこう。食を嘆くシドロランとは対称的にひたすら貪り食うオージュは、1264年の物語において、城の外で夕食を食い損ないはしたものの、金貨の横溢する彼の城は黄金時代の隠喩であった。聖王ルイとは一悶着あったが、1439年の物語に移るとともかく金は守られ、オージュは紛う方なき黄金時代の住人として目覚めてすぐに貪り食った。ジル・ド・レの解放のためにパリに向かう途中で食したのも実に豪勢だったが、これがきっかけとなってオージュはシャルル7世に対する謀反に加わることになった。危うい雰囲気が漂う中、テキストはここでキューブトン(シドロランの平底舟)に向かわせ、銀の時代の人間なの

か、と問わせておき、きわどいところで、否、と答えさせた。しかし、謀反が不調に終わり、彼一人が国王と対峙することとなった時、城の蓄えが残り少ないことが料理長の話で明らかとなる。相変わらずオージュは意に介していないようだが、銀の時代は確実に近づいており、これに呼応するかのようには前半最後の金がシドロランの物語に挿入された。この金が瀕死の黄金時代を象徴する記号で、同時に想起された銀ないし鉄が終焉後の時代を暗示するものであるとするならば、シナリオに唯一欠けているものは絶対的な食の危機である。これまでのところ、我々の拘束的な読みに破綻はなかったと思われるが、これが是認されるためには、オージュが真に絶望的な空腹を経験する必要がある。果たしてシナリオは完成するのであろうか。

さて、なかなか姿を見せない王の軍隊を待つ間、オージュは気晴らしに狩に出向くことにした。そこで何故か絶滅したはずのマンモスに遭遇し、大物狙いに用意しておいた自慢の大砲は踏み潰され、家来も、馬も、犬も、ムスカイヨも、愛馬デモステータヌさえもが逃げ出してしまった。森に一人取り残されたオージュは「剣をさやに収め、それから少しばかり歴史状況を凝視しようと試みた」(F.B., p.104)。彼が《歴史状況 situation historique》を凝視するのはこれが三度目で、先の二つはいずれも 1264 年と 1439 年の物語の冒頭であった。つまり、この象徴的な行為は時代の節目を表わすもので、ここで彼が目にする「森林然とし誰もいない」(F.B., p.104) 歴史状況は、一人迷うこの深い森においてやがて語られるであろう劇的な出来事を予感させる。実際、テキストはこの場面を利用して、食の不安とは無縁と思われたオージュもまた「質素な食事を、ましてや食事が無いことを何よりも恐れている」(F.B., pp.104-105) ことをはっきりと述べ、事実、オージュはここで初めて《腹が減る j'ai faim》という表現を口にするのである<sup>29)</sup>。いよいよ高まる破局の予感。ただならぬ雰囲気は漂う中、オージュはどうか一軒の小屋に辿り着いた。しかし、公爵の身分を告げても戸は開かない。何度命じても鍵は閉じられたまま。これをこじ開けたのは、情けに訴える策略として叫んだ《腹減った j'ai faim》の一言。だが、これが切実な絶望の言葉とな

る時がいよいよ訪れる。オージュを招き入れた木こりの娘リュシュールは、この高貴なる客人をもてなそうとフランス革命歌を踊るが、時代錯誤の革命であっても封建貴族オージュの気には入らない。歌を娘に教えた父親を縛り首にしてやるというオージュに対して、「パパを吊るしたいのであれば、料理を火の中にぶちまけますよ」(F.B., p.108)と相手の弱みをつく小娘。緊迫する睨み合い。ついにオージュは実力行使に出た。

公爵はこっそりと立ち上がり、指を焼けどする危険を冒して土鍋に飛び掛ろうとしたが、娘は領主の動きを注意深く見ていた。彼がついに突進した時、ばしゃっ、栗も団栗も胡椒の粒も炎のなかへ真っ逆さま。それらは炭火に姿を変えた。

— またしても失敗だ、と公爵はつぶやく、木こりの娘を殴る元気さえなく。(F.B., p.109)

例のシドロランの嘆きである。オージュは「やれやれ腹が減った、やれやれ腹が減った、本当にはらべこだ *Ce que je peux avoir faim*」(F.B., p.109)と嘆き続けるが、直訳すれば「私が空腹になることがあり得るなんて」という意味で、これまでは想像もできなかった決定的な危機を、彼は、今、ここで、知ったのである。ここでと言うのは、「いいか、わしは自分の家にいるのだ。ここでは全てがわしのものだ、森も林も木こりも藁葺きも娘も」(F.B., p.108)とあるように、オージュは絶対的な空腹を、パリや遠くのどこかではなく、まさしく自分の領内で味わったからである。黄金時代の終焉、破局のシナリオの完成である。

## II-6. 1439年(その6): 減退的な解決法

この時、オージュが思ったことは何か。

— 本当に、ここには他に食べるものはないのか。[……] もちろん、



ここに、この若い人間がいる。友にして戦友のジル・ド・レならば、一瞬たりとも躊躇しなかったことであろうが、わしはもう十分に厄介な話を背負い込んでいる。(F.B., p.110)

この時代の物語でしばしば話題となった人食い元帥ジル・ド・レの意味するところが、ようやくここで明らかとなる。口減らしである。オージュの領内は飢饉であった。この地を離れることなく、かつ相変わらず労働なしに食物と人口との均衡を維持しようとするならば、食物は増えないのだから意図的に人口を減らすしかない。『規範』はこれを《減退的な解決法 solutions déperditives》と呼び、「こうしてひとつの擬似的—黄金時代が、集団の生贄に供された成員（胎児、低年齢の子供、老人）を犠牲にして確立される」（H.M., p.48）としている。ここで先にまとめておいた『規範』の筋立てに戻って言えば、黄金時代を失った人間は、銀の時代に向かうのではなくして、この解決法を採ることもあり得る。物語において1003人もの幼子を虐殺し食したとされるジル・ド・レの怪物性は、実際に食すかどうかは別にして、この陰惨な口減らしの極端に歪められた寓意に他ならない。

結局のところ、オージュは減退的な解決法を採らなかった<sup>30)</sup>。それどころか、食の危機の元凶たるリュシュールを妃として自分の城に迎え入れたのである。すなわち、黄金時代の終焉の受け入れである。「彼ら [=起源の人間] を打ちひしぐ最初の不幸が彼らを歴史の中へと投げ込み、こうして年代史が始まる」（H.M., p.24）とあるように、真の空腹を知ってしまったオージュは、もはや起源の幸福に回帰することはできない。実際、《厄介な話=歴史 histoires》を理由に娘を食すことを躊躇するオージュは、この絶対的な危機を契機として、これまで自らの物語から排除しようと努めてきた歴史を、ここで初めて自らのものとして受け入れたかのように見える。だが、果たしてそうか。「人生においては策を弄せねばならぬ」（F.B., p.93）を信条とするオージュのこと、何か悪知恵を働かせているのかもしれない。オージュはリュシュールを食の対象とはしなかったが、「彼らは明け方まで遊んだ」

(*F.B.*, p.110) が暗示するように、彼はこの娘を性の対象として生かした。減退的な解決法に訴えることなく、かつまた性欲を制限することもなく、「最善の状態に最も近い解決策の採用の原理」(*H.M.*, p.57) に従って食の危機を克服するには、より豊富な食物を他の場所に求めるか、あるいは何らかの僥倖により食物量がふたたび増加に転ずる以外にない。いずれにせよ原初の気安さは永遠に失われてしまったのであり、これらが可能であるとしても擬似的な黄金時代でしかない。すなわち銀の時代である。今後、彼の城はそのようなものとして様変わりするのであろうか。そしてまたリュスユールは、いかなる策術のために城の住人となったのか。

### 註

#### \* 使用テキスト

Raymond QUENEAU, *Les Fleurs bleues*, Gallimard, 《folio》, 1965. (なお引用に際しては略号 *F.B.* を用いる。)

Raymond QUENEAU, *Une Histoire modèle*, Gallimard, 《nrf》, 1966. (なお引用に際しては略号 *H.M.* を用いる。)

- 1) 『規範』の序文には「『青い花』に興味をもっていただいた方々に補足的な情報を提供するように思われる」(*H.M.*, p.8) とある。ただし、『規範』が執筆されたのは1942年のことで、クノーは20年以上も放棄していたテキストを『青い花』の発表に合わせて世に問うたわけである。
- 2) 『規範』の『慣性の原理』にはこうある。「ひとつの集団がみずから消滅することは決してない。その最終的な破壊を完遂しその消滅を確実なものとするためには、なんらかの外的な力の介入が常に必要である。例えば外国による征服や大災害など」(*H.M.*, p.87)。
- 3) Jean-Yves POUILLOUX, *Les Fleurs bleues de Raymond Queneau*, Gallimard, 《Foliothèque》, 1991, p.151.
- 4) *Ibid.*, p.164.
- 5) 拙論「レーモン・クノーの『ひとつの規範的な歴史』における歴史＝物語の終焉について」、『人文研究』102号、小樽商科大学、2001。
- 6) オージュの口をとおして明示される《夢》、《言葉》、《歴史》という三つのテーマ系 (*F.B.*, p.40) に、様々な引用ないしパロディーが絡まりあっている。
- 7) 「どうして読者にある程度の努力を求めてはいけないのだろうか。我々はいつもすべてを説明してしまう、読者に。彼は最後には、自分がこんなにも侮辱的な扱いを受けることに、気を悪くしてしまうのだ、読者は。」(Raymond QUENEAU, 《Prière d'insérer de *Gueule de Pierre*》 in *NRF*, no 254, Gallimard, 1934.)
- 8) ここでは言葉遊びの内容には立ち入らない。なお、同様の歴史状況の記述は冒頭において三度繰り返されており (*F.B.*, pp.13(×2), 15), いずれも《ノルマン人のカルヴァ [ドス]》で締めくくられ、『青い花』の反復性を強調している。

- 9) *F.B.*, pp.17, 31, 52, 112, 125, 159.
- 10) *F.B.*, pp.67, 69, 73, 119(×2), 178.
- 11) クノーは「人間が労働なしに豊富な食物を獲得し、その終焉を予見しないような一時期を黄金時代と呼ぶ」(*H.M.*, p.26)と定義している。
- 12) シドロランの物語にはここまで6度登場している(*F.B.*, pp.19, 20, 21(×3), 31)。全体で64度反復されるこの記号は、今後『青い花』の主旋律となっていく。
- 13) ノートル・ダムの工事には3度言及されている(*F.B.*, pp.15, 18, 27)。これに対応して、シドロランの物語の冒頭においても、ひとつの建物 *immeuble* の工事が開始される(*F.B.*, p.28)。以後、工事という意味での《travaux》はこれを最後にしばらくテキストの表面から姿を消すが、その象徴的な意味は、時を経るにしたがって次第に明らかとなっていく。なお、先にふれた《労働者》を挟み込むふたつの鉄は、この「作業中の建築物 *bâtiment*」(*F.B.*, p.45)に関する場面に挿入されている。
- 14) ただしオージュが歴史について無関心だというのではない。むしろ逆で、彼はオネジフォールにしばしば《一般的な全世界的歴史と個別的な一般歴史 *l'histoire universelle en général et l'histoire générale en particulier*》について問いかけている(*F.B.*, pp.40, 54, 59, 88-89)。これは『青い花』の根幹にも関わる問題であるだけに、ここでは保留しておいて、我々の拘束的な読みが終わった後に改めて検討したい。
- 15) オージュは「私はメロヴェの直系であり、ということはカペーの奴らなんか私にとってはまったく下らない」(*F.B.*, p.75)と述べている。つまり彼はフランクの第一王朝の血を引いており、この意味でも起源の人間の後裔を思わせよう。
- 16) *F.B.*, pp.54, 55, 56(×2), 57, 58.
- 17) *patravéfitours* とは聖王がオージュに課した6657回の《(我らの)父よ *Pater (noster)*》、同じ回数数の《アヴェ・マリアの祈祷 *avé*》、その三分の一の《我告白す *confiteor*》からなる合成語。
- 18) 実際、パリでは予見が働くようで、「閣下、とムスカイヨが言う、あなたが予見していたように、事は台無しです。私たちの国に戻られたらいかがです」(*F.B.*, p.35)とある。
- 19) 散歩以外にシドロランの無為な生活における活動を挙げれば、後に彼自身が「私の仕事 *mon travail*」(*F.B.*, p.117)と称するペンキ塗りがある。とはいえ、これで生計を立てているというのではなく、誰かが彼の平底舟に中傷の落書きをするのでペンキを塗って消しているだけである。いったい犯人は誰なのか、シドロランの物語は次第に一種の探偵小説のような雰囲気を帯びていく。
- 20) この表現は全体で15回反復される。なお、《campigne》はクノーによるフランス語化。
- 21) 古フランス語において《鳥 *oiseau*》は《*oisel*》で、その女性形は《*oiselle*》であった。
- 22) この時代と平行するシドロランの物語の冒頭は省略する。この部分では註14)に示したオージュの問いに答えるかのようにちょっとした歴史談義が展開されているが、先と同じ理由により以後の課題としておく。
- 23) 論述の関係で逆になったが、《貪り食う *dévoré*》が初めて用いられるのはこ

- の場面である。したがって、まず金貨の横溢が黄金時代を想起させ、この動詞がそれを確証するとも言える。いずれにせよ、オージュが紛う方なき黄金時代の住人であることに変わりない。
- 24) *F.B.*, pp.80, 81(×2), 82(×2).
- 25) 彼は二重の意味で労働を知っている。ひとつは文字通りパリ交通団の運転手として、もうひとつは喫茶店でのラメリーとの《舌学 *linguistique*》の際に、熱烈なラメリーの接吻を引き離す「作業 *travaux*」(*F.B.*, p.48)を行ったという点において。
- 26) 実際、キュヴトンはラメリーとの結婚にはこだわっておらず (*F.B.*, p.77), 持参金がないことを知ると「そういうことでしたら、ええと、どうしよう、どうしよう……」(*F.B.*, p.82)と結婚に対し躊躇さえ見せている。
- 27) ただし、オージュは新語創造の特権を有しており、《シエスタ *sieste*》, 《ハンカチーフ *mouchoir*》, 《平底舟 *péniche*》について「これらはわしが夢に見る物を指し示すために発明した言葉だ」(*F.B.*, p.42)と述べている。対するシドロランは、「誰でも当たり前にも新車を持つ」(*F.B.*, p.61)というのに免許さえ持たず、また誰が何と言ってもテレビを買おうとしない。つまり、彼は徹底した慣性の原理として、発明品に具現される歴史の進展を遠ざけているように見える。
- 28) このことは、獄中のアルペールを思っ居酒屋の主人オネジフォルが「カウンターの陰で泣き崩れる」(*F.B.*, p.266) 場面に暗示されている。さらに、この囚われのアルペールは、後に言及されるパスティユに投獄されたマルキ・ド・サドとも通じ合っている。
- 29) 「腹が減りすぎた *j'ai tellement faim* ので、そいつ [=オージュが巨大な光る蛆虫と思っているもの] でひとつ軽い食事といくか」(*F.B.*, p.105)。
- 30) クノーも減退的な解決法は「(労働と同様に) この時代の気安さとも安定した周期的な解決とも両立しない」(*H.M.*, p.59) ので認めることはできないと述べている。